キャラクター名
茶川　楓

プレイヤー名

シンドローム	ソラリス ソラリス	ワークス	UGNエージェントA	カヴァー	
オプショナル		年齢	23	性別	女
覚醒	感染	衝動	嫌悪	初期侵食率	29 %
出自		経験		邂逅	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0	1	0			1
感覚	0	0	1			1
精神	2	0	0			2
社会	6	0	0			6

HP	24
行動値	4
(非装備時)	4
戦闘移動	9
全力移動	18

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			ＲＣ	1		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達	3	
運転：			芸術：			知識：医学	5		情報：UGN	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

応急手当キット	
医療トランク	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 18	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
戦乙女の導き	4	2	メジャー	至近	単体	自動	ー	
効果：	対象の次のメジャーの判定に+LVD。攻撃なら攻撃力+5。							
狂戦士	4	5	メジャー	視界	単体	自動	80↑	
効果：	対象の次のメジャーのC値-1(下限6)。判定に+[LV*2]D							
女王の降臨	3	5	セットアップ	至近	自身	自動	ピュア	
効果：	自動成功のメジャーのエフェクトを1つ使用する。侵蝕値は合算。シナリオLV回。							
奇跡の雫	2	6	オート	視界	単体	自動	100↑	
効果：	自身不可。対象の戦闘不能回復。HPを[LV*5]回復させる。シナリオ1回							
タブレット	5	2	オート	至近	自身	自動	ー	
効果：	ソラリスのエフェクトの射程を視界に変更。シーンLV回。							
多重生成	2	3	オート	至近	自身	自動	リミット	
効果：	タブレットの効果を受けたエフェクトの対象をLV+1体に変更。							
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

【来歴】
結婚後中々子宝に恵まれなかった夫婦の元に生まれた一人娘、それが茶川楓だった。母親は適齢期を過ぎていたこともあり、産後に体調を崩して亡くなり、父親の男手一つで育てられる。
周囲からの哀れみに対しての反感、父親が仕事で帰りが遅いための孤独感から次第に反抗的になっていき、高校生の頃には不良生徒の一員になっていた。父とは話す度に衝突し、仲間達と行動を共にするようになった。
楓が求めたのは我を通す強さだった。しかし、仲間といて居場所はできても、それは根本的な解決にはならなかった。意地を張れば張るほど周りの視線は冷たくなり、より意固地になっていくばかり。父親の言葉にも条件反射で噛み付くようになった。ただ背いて意地を張ることで特別な何かを得られるわけではない。それをこの頃の彼女は知らなかった。
そんなある日の夜、いつも通り仲間の元に向かおうとした時、父親が止めてきた。顔色が悪く、ひどく疲れた様子だったが、楓は気付かず悪態を吐いて払い除けた。
溜まり場では仲間達が盛り上がっていた。仲間の一人が妙な薬を手に入れたというのだ。。苛立ちを募らせていた楓は他の者たちと共にそれを口にする。何も起こらないと思っていると、仲間達が一人、また一人と苦しみ出し、楓もまた全身を激痛に襲われ、意識を失った。

意識を取り戻したのはただの病院ではなくUGNの医療施設だった。そこで楓は自分がオーヴァードになったことと、変貌した世界の真実を聞かされる。自分以外の仲間達が死んだことも。仲間達と飲んだ薬はFHがαトランス(オーヴァード化させる薬)を元にしたオーヴァードに覚醒させる薬だったが、仲間の大半は耐えきれずに死亡し、残りもジャーム化したため討伐されたとのことだった。
困惑しているところで更に楓を追い詰める事実がもたらされる。父親が亡くなったのだ。
元々年齢も還暦に近く、男手一つで仕事と家事、育児をしていた事からかなり身体が弱っており、既に病に冒されていた。
あの夜、楓が出て行ったのを追ったのだが、体力を消耗して病状が悪化。遺体が翌朝に発見された。

遺品の整理をしている際、死期を悟っていたのか父親の遺書を見つける。封筒の中には母の遺書も入っていた。それを読み、如何に自分が待ち望まれ、愛されていたかを知った楓は涙を流し、幼い子供のように両親を呼んで涙した。